

『柳田國男とヨーロッパ 口承文芸の東西』

加藤 耕義

本書は、柳田が自らの口承文芸理論を確立していく際に、ヨーロッパのいかなる文献を読み、その方法論と知識をいかに応用していったかという問題を中心に扱っている。

後書きによれば、成城大学民俗学研究所の共同研究プロジェクト「柳田國男とヨーロッパの口承文芸」が二〇〇三年四月に組織され、その後三年にわたる研究成果がこの本である。プロジェクト参加者は、英文学、独文学、仏文学、日本文学、民俗学各分野の専門家であり、内容もきわめて広い範囲に及んでいる。そのおかげで、柳田國男とヨーロッパの関わりをそれぞれの専門家の視点から多角的に見ることができるといえる。

成城大学には一九六二年、柳田が逝去したときに寄贈された約二万冊の蔵書があり、この「柳田文庫」には、単行本一四三四冊、雑誌約九〇〇冊の洋書群が収められている。そこには柳田の読了自記や、アン

ダーライン、欄外メモの書き込みがあり、それにより、柳田が何に注目しながら読んでいたかがい知ることができるといえる。

本書は、三部構成になっている。第一部は「柳田のヨーロッパ口承文芸研究」、第二部は「昔話伝説の東西」、第三部は「テーマ研究」である。ここでは、本書の要である第一部を中心にその特色を紹介し、感じたところを述べていきたい。

第一部「柳田のヨーロッパ口承文芸研究」は、「国別」と「ジャンル別」に分けられている。「国別」は、「ドイツ」「イギリス」「フランス」その他（フィンランド／ロシア）の四項目に分けられており、柳田がそれぞれの国の文献にどう取り組んできたかが検証されている。

「ドイツ」は、編者の高木昌史氏が、おもに柳田の著書から証言を引いて、柳田がドイツ語の文献をどのように評価し、利用した

かを紹介している。たとえば、ベヒトルト・シュトイブリ編の『ドイツ俗信辞典』は、ドイツのみでなく、各国学会の協力体制で作成されたものであるが、柳田がこれを高く評価し、『郷土生活の研究法』の中で、「この合同の効果はかなり大きなものであったらしい」と書いていることが引用されている。柳田の目に、各国の研究者が協力しあつて比較研究の基盤をつくっていることが、理想的に映ったことがうかがえる。

また、柳田がハイネの『流刑の神々』について「夙に其中には今日大いに發達すべかりし学問の芽生を見せている」と述べていることを引用し、高木氏は「柳田は日本文化の古層に目を向け民俗学を樹立するべき重要な示唆を『流刑の神々』から読みとったと思われる」と指摘している。また、ボルテ／マツケンゼンの『ドイツ昔話事典』や、各種の民俗学学会誌に紹介されている昔話に、その類話とみなすことのできる日本の昔話の題名などをさかんに書き込んでいたことが紹介されている。この「ドイツ」の項からは、柳田の三つの興味、すなわち、ヨーロッパ民俗学の研究体制への興味、神話的なものへの興味、そしてヨーロッパの昔話と日本の昔話の

比較への興味、を見てとることができると。

同じことが、牧野陽子氏による「イギリス」からも読みとれる。この項は私にはとりわけ興味深かった。「イギリス」では、とくにジョージ・ローレンス・ゴムと、シャーロット・ソフィア・バーンをとりあげ、柳田自身による書き込みを通じて、柳田が自らの口承文芸研究を築いていく上で何を吸収しようとしたのかを読みとろうとしている。この試みを通して得られている結果は、本書全体にとって重要と思われるので、少し長くなるが、直接引用する。

「柳田の書き入れ箇所に関して全体的な特徴として指摘できるのは、本全体の、また各章の序論、概説にあたる部分に多く下線を引いていることである。つまり、「民俗学」の考え方、捉え方にかかわるところをおさえている。

そして本論や後半部分のイギリス各地、各国の民話、民俗の例など具体的な内容の記述に入るところでは、下線は少なく、対応する日本の風習や民話を欄外に書き入れている。つまり、柳田の関心がこゝでは、事例の対比にあったことがうかがわ

れ、柳田は外国のフォークロアをも日本のフォークロアと常に対比させながら、読んでいたことがいえる。さらにいえば、欧米やアジアなど外国の民俗そのものに興味があったというよりは、柳田の場合はあくまでも日本の民俗へのアプローチの方法の模索、類型の参考として、読んでいた印象をうける。そして、柳田は欄外の脚注、インデックスの事項、参考文献にも細かく下線やチェックを入れており、引用や出典の記載を自分の研究に十分に利用している。」

「ドイツ」の項では、柳田の文献への興味のあり方を彼の著作からみたが、同じことが蔵書の下線からもみてとれることがわかり、興味ぶかい。

もうひとつこの項で面白いのは、柳田の考え方の変遷も、柳田が引いた下線から読みとろうとしていることである。牧野氏は、「興味深いのは、再説をおこなっているゴムの著作の場合であり、最初に読んだ時の書き込みと七年後に二度目に読んだ時のものがはっきりと区別できる。二度目の時期は、ジュネーブ赴任の体験を経た後になり、そこに柳

田國男の関心の推移をあとづけることができるのではないかと思われる」としている。たとえば、柳田は、ゴムの「残存物」という考え方に注目し、繰り返しこの言葉に下線を引いている。伝承を古い信仰、習慣、記憶の残存と捉える考え方である。この「残存物」について、一度目の下線と七年後の下線で、考えが変化していることが指摘されている。

「民俗のなかにみいだされる古代の習慣や信仰は、外的な力によって発展を中断させられた。それらは、世代から世代へと全く凍り付いた状態で残っていくか、崩壊し分裂して断片と化してしまう。単なるシンボリズムに退化するか、力を失って単なる迷信になってしまう。共同体全体が日常的に遵守することはなくなり、ある階級または一部の人々が個人的に守るだけとなつてしまひ、もはや人々の行動全般に影響することなく、孤立し息をひそめるようになるのである。かくしてフォークロアにおいては、より高度な文化段階への発展はない。」

直線の下線が二度目の読書の際に赤ペン

で引かれた下線で、最後の波線は一度目に引かれたものである。柳田は同書次ページの、「文明社会においては無意味に存在する(?)」という部分に下線と疑問符を付けている。このことから、牧野氏は、柳田がこれらの下線部分に同意できなかったと分析し、「柳田は、古い伝承や習俗などが、単なる「残存物」としてあるのではなく、現代においてもなお生き続けていることにこそ意味を見出したのではないか。そしてそうした『民俗』が生きている文化として日本を見ようとしたのだと考えられる」としている。すでに一度目にも「フォークロアにおいては、より高度な文化段階への発展はない」という部分に下線をひいているので、当初から柳田がこれに同意できず、二度目にその思いをさらに強めた可能性もある。いずれにしろ、柳田が、ヨーロッパの研究を無批判に受け入れるのではなく、ひとつひとつ、日本の伝承のあり方と照らし合わせ吟味しながら読んでいたことがうかがえる。彼の民俗学に対する考え方を浮き彫りにした興味深い指摘であると思う。

次に「フランス」について、簡単に触れておく。フランス語の書物への読了記録が始ま

るのは、英語文献を精力的に読んだおおよそ十年後、柳田が国際連盟委任統治委員として一度目の渡欧をした一九二一年からだであろう。この項では、ジェデオン・ユエ『民間説話論』が、柳田の『桃太郎の誕生』に影響を与えたこと、また柳田がペローを「優れた学者」と評価したこと、ポール・セビオからは柳田が「口承文芸」という言葉を得たことが指摘されている。その一方で『郷土生活の研究法』では、「仏蘭西の概況」と題して、仏蘭西の研究が「日本と同様に、実はあまりまだ統一せられて居ない」と、あまり評価をしていなかったことが報告されている。

「その他の国」では、フィンランドのカールレ・クローン『民俗学方法論』を昭和六年九月に読了していることやアンティ・アーネに言及がなされている。ロシアについては、アフアナシエフを高く評価していたことが書かれている。

さて、ここまでが国別の項であり、いわば縦割りの分類に従った分析である。これに対し、『ジャンル別』では、「昔話」「伝説」「聖者伝」「民謡」「諺」の五項目に分けて、いわば横方向の分類に従った分析を試みている。ここでは「昔話」と「伝説」に触れたい。

「昔話」の項で高木氏は、柳田が「まず昔話研究の中心人物をグリム兄弟に、そして当時の『学問発達の中心』をドイツに見ていた」と指摘し、ドイツ語の文献を中心に扱っている。まず、ヨハネス・ポルテ／ゲオルク・ポリフカの『グリム童話集注』全五巻のうち、柳田が数多くの下線を引き、集中的に研究していたのは、第四巻と第五巻の「世界民間説話史」であることが紹介されている。柳田がグリムのメルヒェン集そのものへの注釈や類話よりも、ポルテ／ポリフカの研究や方法論に注目していたことは、「国別」の項で繰り返し指摘されていたことと一致している。

グリム童話集そのものについては、柳田が所有していたレクラム版とポルテ・ポリフカの注釈書への書き込み箇所を対比し、詳しく紹介している。そして、柳田が徹底研究したKHMテキストを次のように分析している。

- ・ 日本にも類話があり比較研究が可能なもの。「灰かぶり」と『千匹皮』、『三つの言葉』、『手のない娘』等々。
- ・ 笑話。「賢いエルゼ」、「ハンスばか」、「物知り博士」
- ・ 年寄りの悲哀物語。「年取ったお祖父さんと孫」、「老犬スルタン」。

・動物の主人公Ⅱ「猫とねずみの共暮らし」、
「狐とがちょう」等。

・民俗学的に奥深いテーマを宿す話Ⅱ『ねずみの木の話』や『熊皮の男』。

これは、柳田の比較研究を発展的に試みた、本書の第二部「昔話・伝説の東西」へと通ずるシエーマであろう。

「伝説」は、牧野氏によるイギリス関連と、富山典彦氏によるドイツ関連の紹介に分かれています。

イギリスに関する項で興味深いのは、柳田が、繰り返し、「子孫」とか、「妖精の先祖」といった語に下線を引いていたことである。このことは、本書第三部にある田中宣一氏の「柳田國男の口承文芸研究」と照らし合わせると、重要な指摘であることがわかる。田中氏は、柳田の口承文芸への関心が、地名や家名などへの興味から発展し広がっていったことを次のように指摘している。「柳田は、

現行の昔話は神話と遠く離れたものになっているが、元来、昔話は神話と無縁ではないと考えた。かつて一族の始祖誕生と一代記を語る神話が伝承されていたことを想定し、これと桃太郎話のように主人公のただならぬ誕生と成長活躍を語る昔話との類似点に着

目した」とある。ここでは昔話を中心に述べているが、伝説への興味も同様である。

富山氏によるドイツの伝説に関する項では、カールレ・クローンの『民俗学方法論』への書き込みや下線を示した上で、柳田は日本の伝説についての知識を学問として体系化するためのヒントを、クローンの方法論の著作と向き合うことで得ようと努めていると指摘している。また「新しい学問において、方法論的な修練を積むだけでは十分ではない。自分独自の思考をする能力を持ち合わせていなくてはならない」や「事実の壁にぶつかつたとき、頭でもって足早にその壁に向かって行つてはならず、引き返して、別の方向に出口を探さなくてはならない」という部分に二重線を引いているということからも、

柳田が新しい学問として、日本の状況にあった形で、民俗学を築こうとしていた意識を説きとることができるといえる。

以上のように第一部は、「国別」と「ジャンル別」に分けて記述されている。高木氏が第三部「柳田國男のヨーロッパ口承文芸地図」で、「彼（柳田）はヨーロッパ全域を視野に入れた口承文芸地図を脳裏に描いていたようである」と書いていることから、国

別に整理した意図は明らかである。しかし、たとえば、ペローの昔話については、「国別」で扱われ、グリム童話については「ジャンル」で扱われている。高木氏は序において、この本が「比較研究ハンドブック」を企図していると述べており、その点では、国別か、ジャンル別のどちらかに整理しているほうが、利用しやすかつたのではないかと思う。

さて、第二部は「昔話・伝説の東西」と題した日本とヨーロッパの比較研究である。「昔話」では柳田監修の『日本昔話名彙』にある「聴耳」「歌い骸骨」「糠福米福」「姥皮」「大工と鬼六」「姥捨山」「うつぽ舟」「味噌買橋」の八例が取り上げられている。田中宣一氏が、日本の昔話について紹介と解説をし、磯部祥子氏が『今昔物語集』や『日本霊異記』『お伽草紙』など、日本の古典との関係を解説し、高木昌史氏が、ヨーロッパの類話を解説している。「伝説」では、『日本伝説名彙』

の分類にしたがい、「木（植物）」「石・岩」「水」「坂・峠（山・丘）」が扱われている。こちらは、磯部氏が日本、牧野氏がケルト、そして高木氏がドイツの伝説を挙げている。この第二部を高木氏は序において「柳田が開拓した口承文芸の比較研究を発展的に継承する試み」と

位置づけている。柳田が築いた基礎の上に積み上げられてきた口承文芸研究の成果を、今後世界にむけて、どう発信しうるかということのヒントをこの第二部は与えてくれるものと思う。その意味で、この第二部は、柳田がヨーロッパの研究をどう取り入れたかということテーマにした第一部と対をなすものと言えよう。

第三部は口承文芸についての個別論文である。田中宣一「柳田國男の口承文芸研究」、上野英二「燐突姫と白鳥処女・柳田國男『昔話と文学』覚え書き」、富山典彦「オーストリアの民俗学者レオポルト・シュミットの民話論」、前川恵「『ペロール説話集』の書き込みについて」、高木昌史「柳田國男のヨーロッパ口承文芸地図」の五編が収められており、いずれも専門性の高い研究である。それぞれに内容は独立しているが、第一部と関連づけながら読むといっそう興味ぶかいと思う。

本書は、大きく独立した三部構成で、しかも各分野の専門家による一大プロジェクトの成果であるから、それぞれの執筆者の視点が前面にでている。これを個々の独立したものと捉えずに、それぞれの項を関連づけて読んでいくと、本書全体として「柳田國男がど

うヨーロッパの民俗学とかかわったか」というテーマが浮かびあがってくる。第一部、第二部、第三部も、それぞれ独立と考えずに、柳田がヨーロッパから何を吸収したか、日本はこれから何を発信できるか、現在の柳田研究はどうなっているかという風に関連づけることで、本書の「比較研究ハンドブック」としての有用性が浮かびかかってくると思う。

(二〇〇六年、本体三五〇〇円、三交社)

(かとう・こうぎ／学習院大学)